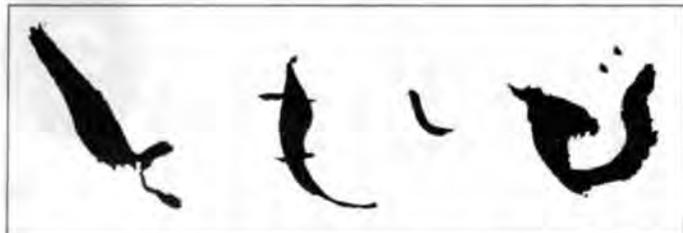


大学婦人協会東京支部

1991.7  
第10号

- ・記念講演「均等法の時代—これからの職場と女性—」
- ・浮世絵講座 一講義・見学会—

## 支部総会開かれる

'90年度東京支部総会は四月二十日(土)国立教育会館で開催された。

出席者五一名、委任状三三八で会は成立。始めに支部長より来年四月三、四日、全日空ホテル(東京)で開催予定の第35回通常総会では、委員一同協力し開催準備を進める所存であるが、会員諸姉のご援助を是非お願いする旨、挨拶があった。

議事に入り一九九〇年度事業報告及び決算報告、会計監査報告、承認等に続き一九九一年度事業計画案及び予算案を審議、承認される。次は交代した会計一名新委員一名の紹介。中村会長挨拶。来春の東京通常総会(JAUW)並びに一九九五年日本開催が決定したIFUW世界大会に向けて、会員への尽力の要請、同時に若い世代の入会を呼び掛けその若い力を借り、大会を成功させたいと熱望された。

今回の記念講演は、「均等法の時代—これからの職場と女性」と題し元労働省婦人局長の赤松良子氏。均等法誕生までのプロセス、将来の展望、可能性と同時に重くなる責任等についてであった。(太刀川洋子)

## 広島での通常総会

金子京子

(東京支部長)

三月三十一日(日)

瀬戸内の暖かい春を期待して、降り立った空港は肌寒く、街には桜花に浮かれた人々の姿も無く静か。

会場「広島全日空ホテル」はミモザの花盛りの中に在った。特設受付で広島支部の方々に迎えられ手続きを済ませる。日暮れて誘い合わせ、食事に街に出るも、食後は早仕舞いの店々の降ろすシャッターに追われ、早々と宿に戻る。

四月一日(月)

「支部長懇談会」十時三十分から十二時迄、各支部長とも、多くの問題を抱えられ、三分に区切って支部毎に発言されるも、共通問題の細部に亘り討論。結論も得られぬ内に時間切れとなる。

「評議員会」は昼食後、一時から、明日の総会に備えての意見調整、しかし午前引続き侃侃諤諤、何時果つとも知れぬ熱心な討論に、遂に時間切れ。

六時からの「懇親会」は、バザーも開かれ、懐かしい東京支部会員の

姿も見え、華やいだ雰囲気はほっと一息。やがて地元高校生の合唱に始まり、会場全員の合唱と、広島支部の苦心の設定に感謝しつつ、食を樂しみ、一時を語り合い、宴は終わる。

四月二日(火)

「総会」九時から、参加者二百人近く、昨夜に増す賑わい。

山崎みね氏司会で式次第通り順調に進む。中断して記念撮影の後昼食、午後は丸山庸子氏司会の懇談、ここでも様々な問題点が指摘され、活発な意見の交換となる。総会は予定時間内に終了。観光に出一行、帰宅を急ぐ人々、名残り惜しく語らう人々の集りと。私は、天候にも恵まれ無事終了された広島支部会員に感謝しつつ空港に向かう。

広島大会は企画に当り、会員数の少なさから、観光会社に委嘱した点に特色がある。

次期開催地東京ということで、支部委員七名が参加、体験、見学勉強し、口々に参考になったことを喜び合った。東京通常総会は十数年振り、口々に参考になったことを喜び合った。東京通常総会は十数年振り、口々に参考になったことを喜び合った。東京通常総会は十数年振り、口々に参考になったことを喜び合った。東京通常総会は十数年振り、口々に参考になったことを喜び合った。

東京支部総会記念講演

## 「均等法の時代」

—「これからの職場と女性」—



（前ウルグアイ大使  
財団法人女性職業財団会長） 赤松良子氏

あれは古代紫、それとも江戸紫。いや、もっとビュアーなアルプスに咲くチシマギキョウの透明度の高いムラサキでしようか。その日のシルクのスーツは、先生の明るい髪と白い肌によくお似合いました。先生は、日本洋画壇の重鎮・赤松麟作氏の愛娘。色彩感覚が優れていらしゃるのも、むべなるかなでございます。

先生のお話がいつも楽しいのは、ご自分自身を私たちに見せてくださるからではないでしょうか。とりわけこの日は、先生の母校津田塾の恩師やクラスメートが聴衆の中におられたのでなおさらでした。（先生は、津田を終えられてから、東大法学部に進まれました。）

ご自分が、頑健ではないこと。でも、これぞというときには、元気がでて乗り切れること。いい意味で、シンゾウが強いこと。などなどおもしろくお話しくださり、会場は笑いの渦でした。

最初に話されたのは、大使としての任地ウルグアイのことでした。南

米の小国ウルグアイが世界にその名を轟かせたのは、第二次世界大戦初期の戦艦シュベール号事件、ツバロマスの名で知られた都市ゲリラ、それらに一九八六年のウルグアイ・ラウンド。先生は、大使としてウルグアイ・ラウンド成立の裏方を見事に勤めたのでした。

次は、現在会長をしておられる女性職業財団についてでした。財団は男女雇用機会均等法が日本社会に定着し、実効性をあげるようにという目的で作られ、研究、調査、セミナー、出版などをおこなっているとのこと。労働省婦人局長として均等法の誕生に携わられた先生にこそ、ふさわしいお仕事です。

均等法制定までのご苦労を、テレビ・ドキュメンタリー「密室の攻防」の説明からはじめられました。草案作りをした労働審議会婦人労働部会は、使用者、労働者、公益代表の三者構成。使用者代表は、財界を代弁する男性たち。当初法制化すら認め

差別撤廃条約署名の具体化、英米やECの事例、日本における女子労働者の増加と勤務年限の長期化などを、バックにいる財界の大立者たちを説明して回られたとのことでした。

労働者側には、均等法は、条約の批准要件であり、条約とワンセットとして考えなければならぬこと。それには、労働者基準法の保護規定の見直しが避けられないことを説かれたとのことでした。

そうしたご苦労があったものの、均等法制定は、歴史的な仕事であり、それに携われたことは嬉しいことだったとおっしゃいました。本当に、パランス感覚に優れ、エネルギーッシュな赤松局長がいらっしやらないければ、果たして均等法が成立したかどうか分からないと思います。

さて、均等法が一九八六年に施行されて以来、女性に追い風が吹いています。それは、日本経済の景気がよいことが原因であり、労働者不足から、女性の採用が増えているからである、と分析されました。そして「何よりよかったのは、均等法ができて『女の子』ではなく、『一人前の労働者』として女性を扱うようになったことです。これからは、『女性に開かれた職場の時代』がくるでしょう」と講演を結ばれました。

先達のご苦労を忘れず、これから女性たちに大いに羽ばたいてほしいものでございます。

なお、赤松良子先生の生きて来られた道をもっとお知りになりたい方は、昨年出版された二冊のご著書をお勧めします。『志は高く』（有斐閣）、『うるわしのウルグアイ』（平凡社）

（山下泰子）

### 国外奨学生を囲む会

一九九〇年度国外奨学生の一人、インドのバンディオバディアイさんの歓送会を兼ねた研究報告会が国外奨学委員会と共催で開催された（4/28）。会場の国際文化会館に美しいサリ姿で御夫君を伴って出席した彼女は、DNAを使ったカエデの樹の分類に関する研究成果を発表した。指導教官の岩槻東大教授と共に同席した学生さんの通訳で、難しいテーマも興味深く聞くことができた。東大付属植物園のハンカチの木など珍しい花のスライドも見せて頂き、楽しい一時を過ごした。東京支部から記念品の贈呈後、バンディオバディアイさんがJAUWへの謝辞と帰国後の抱負を述べて散会となった。

（平野和子）

## 他支部活動紹介

## 大分支部

「この会に入っていないと損だ」と思われるような会にしたい

日野ユリ

当大分支部は会員二十五名の小さな会です。ご他聞に洩れず会員の獲得、会費の徴収に苦勞しながらの運営を続けております。会員の高齢化が進みますので若い人達を血眼になつて探しておりますがなかなか思うように参りません。今年度の総会でも「魅力のある会にするために何かをしなければならぬ」という意見が出ました。そこで本年度は全国セミナーに参加することとし「地球にやさしく—大分県の自然を守る」というようなテーマのもとに全員で研究に取り組もうということになりました。その他の行事としては、外国人との国際交流会や食事をしながらの会員懇親会、中東問題に関する講演会などを予定しております。

## 栃木支部

「積極的に地域活動を」

遠藤ミサ

栃木支部は長い間四十数名の会員で頑張ってきました。当初より本部同様奨学金制度を柱として推進してきました。現在まで約二百名の女子大学生に奨学金又は記念品を差し上げました。十数年来グンスパーティの益金をそれに充ててきました。これは年一回の事業ですがかなり骨の折れる事です。しかしこれを推進していく事が会員同志の大きな誇りと支えになっていくようです。次は盲人の方々への朗読奉仕で指導員になつて活躍している人もおります。一方全国セミナーに参加し、全員が出来るだけタッチするように工夫し、これは会員の研鑽のチャンスであります。本部の方々の活躍振りを肌で感じ、中央の空気を吸える年一回の貴重な事ですから。

最近「古典を読む集い」を始め、「源氏物語」を学習。これは遠慮の

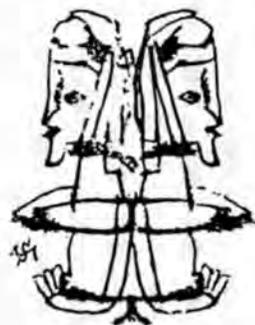
いらぬ「語り合い」の場なのです。

ここ十年来、地域婦人団体との交流を密にし、その中で常に本会の役割を忘れずに、積極的に地域活動に

協力を続けております。

## 桐生を訪ねて

佐藤敏子



五月三十日は梅雨入り前の素晴らしい晴天でした。財務委員会主催のバスツアーで桐生を訪ねました。首都高速から東北自動車道へ、車窓から見る広大な関東平野は、大麦・小麦の実りのときで久しく忘れていた「麦秋」を思い出させてくれました。まず、水道山中腹にある大川美術館へ。この美術館は桐生出身の大川栄二氏の寄贈によるもので、氏が長年にわたり蒐集した約一八〇〇点が展示されています。コレクションの中心は最近になって日本近代絵画史上注目されてきた松本竣介・野田英夫の代表作を含めた八十点です。また一部海外作家を含め、この二人に影響を与えた画家達の作品もあって、絵を人格と見てその人脈をたどって蒐集した、日本で唯一のユニークな

展観を試みています。

大川館長から「絵は心で見えるもの」「上手であっても心のこもっていない絵は人の心をとらえない」など絵を観賞するのに必要なのは知識でなく心であることを強調されたお話をうかがい、直々に館内をご案内いただきました。こじんまりとしたなかにも、落着いた雰囲気の中ではじめて接する画家たちの絵を観賞しました。限られた時間でゆっくりできなかったのが心残りでした。

「ファンベックすずき」で大変おいしいフランス料理の昼食を味わい、午後は織物参考館「紫(ゆかり)」へ。絹織物の産地として栄えた桐生の歴史を守るため、明治から昭和にかけて使用された織機や道具、資料約二〇〇点が展示されています。また実際に織機を動かして説明していただき、縦糸と横糸が交わって織り出す様をつぶさに眺めてその歴史に思いをはせました。

この織物参考館にほど近い養泉寺は太刀川洋子様のご実家で、一同で参詣、ひとときの休憩をさせていただきました。

大勢の方々のお骨折りで、楽しい充実したバスツアーでした。関係の方々に厚くお礼申し上げます。

## 講座を受講して

橋本陽子

浮世絵版画講座の一回目・二回目は、浮世絵研究の第一人者の鈴木重三先生から「浮世絵版画への理解」と題する講義を受けた。

江戸時代に町人文化の中から生まれた浮世絵版画は、初期の墨摺絵から赤色顔料を使った丹絵、紅を使った紅摺絵となり、その後、十数色も重ね摺る多色摺り版画の錦絵が完成し、江戸庶民の間に広まっていく。

浮世絵版画の制作は、版元の下で版下絵を描く絵師、彫ることに専念する彫師、摺ることに生涯をかける摺師の三者が分業で行う。版元は高度な技術を持つこの三者を調整、統合して作品を作り上げ販売する。

題材は広範囲だが、当時の社会を反映した美人画や役者絵などの風俗画や、遠近法や陰影を取り入れた風景画などに優れたものが多い。貴重な資料を見せて頂きながら、後世に残る多彩な浮世絵師たちの作風、特徴などの説明を伺い、浮世絵版画への理解を深めることができた。

三回目は三月二十六日、下落合の閑静な住宅街の一面にあるアタチ版画研究所へ見学に行った。

畳敷きの仕事場でこの道二十年の摺師の方が、葛飾北斎の「富嶽三十六景 凱風快晴」を実際に摺って見せて下さる。顔料を混ぜ合わせ水でといて版木に塗り、刷毛でのぼして慎重に和紙を載せ、竹の皮で作ったパレンで摺る。この時、体重をかけて力を入れてパレンを微妙に動かし、紙の中にきめ込むように摺り込む。紙がずれないように細心の注意を払いながら重ね摺りを繰り返して見事

な富士山の木版画が刷り上がる。一摺り一摺りが真剣勝負の厳しい職人芸。しかも、摺師は絵師の指定に従い自分を主張することは許されない。あとで彫師の仕事場も見学、繊細な線を彫る高度な技法の粋を見る。実際に制作の工程を見せて頂けた御好意に感謝し、この優れた日本独自の木版技術の伝承を願いつつ、充実した気持ちで家路についた。

江戸の華を絵



## 春の鎌倉行

伊藤千寿子

この度、近くに住む妹を誘って肉筆浮世絵見学会に参加させて頂きました。当日は陽射しも程良く、さわやかな陽気で緑の薫りが漂うような新緑の桜並木の段葛を鶴岡八幡宮の方向へ歩き始めました。

のこと、大変貴重な氏家コレクションを拝見させて頂きました。昨今、海外で浮世絵のオークションがあると聞きますが、国内にこのようにまとまって文化遺産が保護されているのは大変喜ばしいことと存じます。

丁度連休を過ぎたばかり、改装成って間もない館内は自然光を程よく取り入れ、冷んやりと静かで、ゆっくり時間をかけて觀賞出来ましたことと感謝申し上げます。

国宝館を後にして、扇ヶ谷の「花村」へ向かいました。お懐石の昼食会でございましたが、竹の子の御飯と含め煮は季節の旬のもの、山椒の香りと竹の子の味が口一杯広がりが大変美味しゅうございました。

昼食後は現在NHKで放映中の「太平記」でもおなじみの足利尊氏が新田義貞と一戦を交える前に謹慎し籠ったという浄光明寺と風光明媚な溪間にたたずむ海蔵寺を散策いたしました。昨年海蔵寺の近くへ妹の家族が引越しをし、お正月も天園ハイキングコースを歩き瑞泉寺を訪れたのですが、お蔭様でしばらく振りに妹に会え、皆様と一日を共にすることが出来ましたことお礼申し上げます。

鳥居をくぐり右手奥に国宝館が建っております。入ってすぐに居並ぶ仏像に心打たれた感じが致しました。「なんとも見事な」と形容したら良いのか、やはり国宝級の仏像は人を魅きつけるもののようにございます。美人画の肉筆の浮世絵は掛軸となっており、たくさん陳列されておりましたが、それぞれが一点限りの品と

### 春の瀬戸内

広島支部で計画して下さった旅行に参加したのだが、四十八名という大人数の旅行グループだった。

まず江田島に行ったが、案内して下さった幹部がきびきびしていて、気持ちよかった。自衛隊の生活を目の当りに見て、その整然とした生活振りには感慨無量だった。資料館を見せて貰ったが、若くして国の為に死んでいった若人たちの手記に涙せずにはいられなかった。真珠湾に散る前に挨拶に来た従兄の手記が若しやと思ったが、この資料館にはなかった。次に宮島に寄ったが、日本三景の一つだけあって、いつ行っても雄大な感じがした。小学校を下関で過ごした私は子供の頃よく行った記憶があるが、久しぶりの訪問で子供の頃見たものとは大分変わっていた。いよいよ四国に渡った。夏目漱石も度々温泉に入ったと見えて、道後温泉の本館には坊ちゃん風呂があった。私達の泊まったのは新道後館で、仲々良い旅館だった。御馳走が夕方にも朝も食べ切れない程沢山出た。普通食べ切れない程出るときはまずいのが落ちだが、どれも美味しかった。シエフ独特の漬物が旅館の朝市に出



(白井 常)

ていた。朝夕クシーで子規塾を訪れたが、そこに入る前に、みかん、ネーブル、ライム、きんかん等十二種類もの柑橘類が一本の木になっていて、という世にも珍しい木に出会った。みんな揃ってその前でパチリ。やがて子規塾に入ったが、漱石も弟子の一人で、子規が弟子の一人一人に野菜の仇名をつけて俳句に読みこんでいるのがある。その前方に坊ちゃん列車があったので乗ってみることにした。宣伝だと分かっていたので、やはり乗ってみる心境が、旅のつれづれというものか。

帰りは瀬戸大橋を汽車で渡ったが、余りに近すぎて、普通の汽車と余り変りがなかった。遠くで眺めた方が橋らしくてよっぽど良かった。

### 四国路

はじめて訪れる四国路への期待に胸をふくらませて、広島港から水中翼船で松山港へ向かったのは、總會を終えた四月二日の夕方であった。

道後温泉で第一夜を過ごし、翌日は午前中に松山市内の観光を終え、JRの特急で瀬戸内海に沿って高松へ。松山では、弘法大師ゆかりの石手寺に参拝、子規博物館と松山城を見学。いくつもの門をくぐった後、急角度の階段を上ってたどりついた松山城天守閣の展望台では松山市街が一望できる眺めを楽しむ。

高松駅でその後ずつと私達の足となってくれた高知の観光バスに迎えられる屋島へ。屋島山上では源平の古戦場壇ノ浦から屋島寺へと散策しながら瀬戸内の美しい眺望を満喫。

三日目は、まず日本三大名園の一つである栗林公園へ。紫雲山を借景にした回遊式庭園は手入れの行き届いた松の緑に彩られて美しい調和を見せている。歴代藩主が茶会を楽しんだという掬月亭でお抹茶をいただいて、しばし優雅な気分を浸る。

七八五段の石段を難なく(?)上って金刀比羅宮参拝をすませ、吉野川の峡谷大歩危・小歩危では船下り

を楽しみ、祖谷溪にかかるかずら橋や急斜面に点在する民家に平家落人の哀れをしのぶ。その後、バスは一路南国土佐の高知へ向かった。



栗林公園にて

高知では、高知城―伊野町紙の博物館―竹林寺―闘犬センター―桂浜―竜馬歴史館―龍河洞と、やや盛り沢山の日程であったが、高知城の夜桜見物や桂浜での思い思いの散策など、ゆとりをもって楽しむこともできた。

訪れる先々で旺盛な知識欲と食欲を満たされ、また、四日間行を共にすることによってお互いの親しみも増し、ほんとうに楽しい有意義な旅をさせていただいた。(吉武勇子)

## 俳句会のあゆみ

佐藤千鶴子

大学婦人協会俳句会が設立されたのは昭和四十三年、伊豆山美津枝東京支部長の時ではなかったかと思えます。同時に読書会、短歌の会も設立されましたが短歌の会だけ解散され、俳句会、読書会は今も連綿と続いております。当時支部長と同窓の東早苗先生（七彩主宰）を迎えご指導いただきましたが、東先生ご病気の為、五十一年に馬酔木同人の村上光子先生と変り、馬酔木の客観的写生を重んじる指導を受け、この間先生のお力添えにより合同句集「早蕨」三冊を出していただきました。年ばかり取りお恥かしい一同でございますが現在十二名、毎月第一月曜日に事務所で一刻を過ごしております。時には吟行、先日も先生のご案内で、甲斐路の桃と美味しいフランス料理を楽しみ、翌日は小海線で八ヶ岳にかかる虹に見惚れてまいりました。こんな楽しい会でございますから、同好の方は一度お出かけ下さいませ。



## 読書会

岩野 鈴

俳句会と同時に発足し、毎月第二火曜一時半から二時間、最初はあちこちと場所を借り、事務所が出来てからは安心して例会をしています。当時は奈良女高師ご出身、母校の教授を勤められた田中温子先生が、日本古典、古事記、源氏、歎異抄、花伝書、未だ世の中にあまり知られてなかった「とはすがたり」等に蘊蓄を傾けられ、芭蕉句集では一同で連歌を作ったこともありました。

先生ご病気でおやめになり、各自で枕草子等読み合っていました。人数十名を切り淋しくなりました。かたるた会、花見等の諸姉との交流を思い出しながら、今は「山川出版資料世界史」を基に年表地図をひろげ、古事記、旧約聖書の神話の時代から現代迄を何種かの本で読んでいます。古事記上・中。昨年九月、鹿島香取両神宮に行き、鹿島灘北総台地の深い森に出雲神話の神々を祀ることは古事記成立が実に政治的であり、語られる神話が大陸、海洋民族のそれと共通し汎世界的と知り得ました。旧約聖書の地が今世界の動きの中心になっていきます。世界が現在の地

図に至る迄のインド思想史ギリシャ神話その他を読み、再び文学作品に戻ることになっていますが、遠い人間の歴史を考えさせられています。

## 東京支部新委員紹介

何の知識もないままに入会させて頂きました。包容力豊かで個性的な皆様の中に身を置いておりますと、何かしら心の安らぎを覚えます。まずは周囲に働きかけて会員を増やす事に努めたいと思っております。

人見美枝子（聖心）

## 寄贈図書紹介

赤松良子編

○「志は高く」  
勤女性職業財団会長で前ウルグアイ大使、赤松良子の半生を肉親、友人の話に研究論文を織り込んで綴る。赤松の今日は才気煥発な女の子に向けられた「女のくせに」を原点とする。職業婦人をめざして津田塾専門学校、東京大学で高度な知識を得した後、労働省にその場を得る。以後一筋に労働問題に取り組んで婦人局初代局長就任を果たす。婦人ゆえのまわり道を経験しながら、終始、婦人労働者の保護と平等の実現に情熱を注いだ。

先年、三六年に亘る官僚生活を終えたが、「挑戦なき人生は退屈」とさ

らに志を高く歩み続ける。

東京支部総会での感銘がさめぬうちに一読されるようお奨めしたい。

○ロックフェラー浮世絵コレクション展図録「甦える美・花と鳥と」

監修 小林 忠

ジョン・D・ロックフェラー2世夫人蒐集の浮世絵版画里帰り展図録、巻末にアダチ版画研究所中山吉秋他の詳細な解説・考察等を付す。

## 編集後記

●雲仙・普賢岳で二百年振りの大規模火砕流発生との報に心痛むこの頃です。「ともしび」はお蔭様で十号を迎えました。講演会の講師の方々も、寄稿頂いた会員の方々も、東京支部ならではの充実したメンバーで、本号をお届け致します。

●六月の委員会では、来春の全国総会に向けて準備体制に入りました。男女雇用機会均等法がレールに乗り、女子の短大も含めた大学進学者数が男子を越える昨今ですが、今こそ、「本当の女性の幸せ」になお横たわる問題点が問われる時でもあるかと思われまふ。実りある総会へと、金子支部長始め委員一同努力致しております。会員諸姉には一層のご協力を賜りますように。（阿南）